

LEADERS NOW!



子供たちに 笑顔と元気を届ける ——「うぶ」が紡ぐ温かな交流

- 児童文化実践サークル「うぶ」
文学部2年次生
代表 竹下 明里 さん (兵庫県立兵庫高等学校卒業)
- システム理工学部2年次生
副代表 堅山 幸太 さん (阪南大学高等学校卒業)
- 総合情報学部4年次生
前代表 林 功一郎 さん (大谷高等学校卒業)

現在、関西大学で活動する学生ボランティア団体は7団体。中でも長い歴史を誇る児童文化実践サークル「うぶ」は、小学校での学童保育や地域の夏祭り、児童館でのイベントなど地域に根差した活動を続けている。子供たちの屈託のない無邪気な笑顔と触れ合うことは、何物にも代えがたいものと日々感じているそう。代表の竹下さんと副代表の堅山さん、前代表の林さんに話を聞いた。



▲子供向けの自己紹介名札



イベントの様子



●学童保育や地域のイベントに東奔西走

「はいー！皆で仲良くなれるおまじないをしまーす！」「せーの！」「パン！パン！グー！」

明るい笑顔と元気な声で子供たちの興味を一身に集めるのは、児童文化実践サークル「うぶ」のメンバーたち。「小学校の学童保育にお伺いした時、最初と最後に必ずするお決まりのあいさつなんです」と話すのは、この4月から代表になった竹下さんだ。

「うぶ」は創設から約60年という長い歴史を持つ。吹田市内の小学校の学童保育でのボランティアが活動のメイン。そこで紙芝居や人形劇、ペープサート(紙の人形劇)、ミニゲームなど、子供たちが楽しく過ごせるようにアクティビティを提供している。また、地域の公民館や児童館からは、イベントやお祭りなどの運営を手伝ってほしいといった依頼が毎月のように入る。前代表だった林さんは「活動の場をいただけるのはうれしかったですね。節分の時には、児童館で豆を投げつけられる鬼役もしました」と、その時のことを楽しそうに話す。



▲サークルのマスコット
パンクーちゃん



●前代表 林 功一郎さん



鬼の登場で大盛り上がりだった節分のお楽しみ会

●ボランティアはもっと身近にできること

全員が入部前からボランティアに携わってきたわけではなく「大学に入って初めて」と話すのは竹下さんと堅山さん。「子供が好きで、直感で入りました」(堅山さん)。「私は教育に関心があったので、子供たちにフォーカスした活動をしていると知り入りました」(竹下さん)。一方の林さんは「僕はもともと、自分の行動で人が笑顔になることが好きでした。子供たちに笑顔届けられる活動内容を知って“これだ！”と思いました」と入部当時を振り返る。

「満面の笑顔でかけ寄ってきてくれるのが、もう可愛くてキラキラしていて、こちらも元気をもらえます」(竹下さん)。「皆がすごい勢いで遊びに誘ってくれるんです。それがとても新鮮で、うれしくて自然と微笑んでしまいました」(堅山さん)。実際に活動を始めたことで、ボランティアそのもののハードルが下がったと感じている3人。実は誰もが気軽に参加できる、身近なものだと気付いたそうだ。



●副代表 堅山幸太さん



▲吹田市立子育て青少年拠点 夢つながり未来館(ゆいぴあ)開催の「第12回ゆいぴあ夏まつり」にボランティアで参加



▲ボランティア活動での学内表彰

しかし活動は順調なことばかりでなく、失敗したり悩んだりすることも。堅山さんは、紙芝居や人形劇に興味がない子供や遊びの輪に入りがらない子供の興味を引き付ける方法を模索中だ。また、竹下さんはジェスチャーゲームでの苦い思い出がある。「人手が足りなくて数十人のクラスに一人で行った時のことですが、子供たち皆の希望に応えきれなくて。何度も頭の中でシミュレーションして準備していたのに上手くできず、反省しました」。そんな時は学童保育の指導員らと行う反省会で相談し、アドバイスをもらう。そこでの学びや新たな発見が次に生かされるそうだ。

特に低学年の子供は夢中になると周りが見えなくなることがあるため、一緒に楽しんで遊ぶだけでなく、大人として安全面での責任を持つことも意識していると林さんは言う。「例えば靴ひもがほどけたまま走って転倒の恐れがないか、暑い日に水分補給せず脱水になっていないかなど、僕たちと過ごした時間が皆笑顔で終わるように、細やかな部分まで配慮することも大切だと思っています」。

●細やかな活動が実を結び、心が通い合う

そんな楽しい時間を重ね、今では顔なじみの子供たちも増えた。「あ、『うぶ』の人だ」と再訪時に顔や名前を覚えてくれているのも喜びの一つ。丁寧に気持ちの通い合う活動を続けていることで、思い出だけで心が温かくなるような経験もたくさんできた。

「初めて参加した時に、緊張して立ち尽くしていたら、子供の方から声をかけてくれました。『新しく来た人？これあげる』と折り紙をくれたんです。それ以来、行くたびに折り紙や、『だいすき』『おぼえていてね』と書いた手紙をくれるようになって。子供からの贈り物は私の宝物です」と竹下さんは素敵なつながりを教えてくれた。また子供たちを取り巻く地域の大人たちとも新たな交流が生まれ、堅山さんは「ボランティア活動をしたことで、自分の世界も広がった」と実感している。

今年から新しい仲間も増え、現在は20人以上で活動している。前代表の林さんからは「今年は均等に活動の内容を分担して、皆で助け合いながら頑張っている印象ですね。安心して任せられます」とのお墨付きだ。「今は週に1回、水曜日のみの訪問ですが、他の曜日も新しい活動ができれば」(堅山さん)。「メンバーが新たにやってみたいと思うことを、どんどん実現していきたいです。皆と一緒に活動を広げていきたいです」(竹下さん)。先輩たちから引き継いだ交流のバトンが、笑顔と共に次世代へつながっていく。



●代表 竹下明里さん